

古墳時代中期における群集墳の土器儀礼

— 北関東地域を事例に —

Ritual using pottery of clustered minor tumuli in the Middle Kofun period

— A case study of the Northern Kanto region —

山本 翔太 YAMAMOTO Syota

要 旨

本稿では栃木県域と群馬県域を対象地域として、古墳時代中期の群集墳から出土した土器群の器種組成や出土状況をもとに、土器儀礼⁽¹⁾の时期的な変遷や地域性を検討した。群集墳の土器儀礼には二つの時期に画期が認められ、中期後葉には両県域ともに群集墳の出現に伴って長脚の土師器高坏を主体とする土器群を用いた供献儀礼が広く採用されており、中期末葉には土器群の器種組成に両県域間で明確な地域差を確認することができる。さらに首長墳や群集墳に先行する小型方墳の事例も含めた比較検討を通して、群集墳の土器儀礼の変遷や地域性の背景には各県域の首長墳系譜の変遷にみられる社会的な動向や畿内の大和王権による地方支配の拡大が大きく影響していたことを土器儀礼の視点から指摘した。

キーワード：群集墳・土器儀礼・首長墳系譜・群馬県域・栃木県域

1 はじめに・先行研究

古墳から出土する土器類を対象とした研究については、土器の器種組成や出土位置、もしくは底部穿孔や打ち欠きといった痕跡に基づく儀礼行為などを中心に検討が進められ、土器儀礼の内容や変遷にみられる時代性や地域性、被葬者の階層性との関係が明らかにされている。

本稿で主な対象とする群集墳の出現や展開の背景は、先行研究で被葬者の社会的な階層性や畿内の大和王権による地方支配との関係が論じられている(白石1981・和田1992ほか)。よって群集墳で行われた土器儀礼の内容や変遷についても社会的な動向と密接に関係していたと考えられる。

古墳時代中期の群集墳における土器儀礼について、畿内を中心とする地域の事例では、中期後半の木棺直葬墓の土器配置で土師器高坏が重視されていたこと、中期末葉のTK23型式期以降を中心に須恵器坏を多用する土器儀礼の成立及び普及が指摘されている(北山2018・楠元1992)。北関東地域における群集墳については、群馬県域を中心に土器の器種組成や出土位置に基づく地域的な土器儀礼の斉一性、首長層との階層間における器種組成の差異などが指摘されている(山田2005・藤野2019)。しかし、土器儀礼の时期的な変

遷や具体的な儀礼の内容については検討されていない。

群集墳の出現や展開については被葬者の社会的な階層性や畿内の大和王権との関係が論じられており、並行する時期の首長墳における土器儀礼との比較検討は極めて重要である。また栃木県域の群集墳を対象とした研究についても低調であり、栃木県域と群馬県域の両県域間における比較検討を行った研究も進められていない。

栃木県域と群馬県域、いわゆる上毛野と下毛野における地域区分については、その地域呼称の成立が6世紀初頭を前後する時期とされており、それ以前から毛野地域において畿内の大和王権との強固な紐帯を維持してきた上毛野と小山市北部の地域を中心に新たに地域統合を実現した地域が下毛野として分割されたと理解することが妥当とされている(右島1990)。さらに土生田純之は群馬県域と栃木県域における横穴式石室の受容に伴う新しい葬送儀礼の導入・定着にも地域差が認められることを指摘した。これら両県域間における対照的な状況については歴史的な背景の根強い違いが想定せざるえないとして、「おそらく横穴式石室導入期よりも相当遡上した段階から、両者は全く異なった地域・社会を形成していたものと思われる」と述べている(土生田1996)。

以上を踏まえて、本稿では古墳時代中期の群集墳における土器儀礼について、出土土器の器種組成に基づく時期的な変遷や階層性、それらの地域性を明らかにすることを目的とする。さらに群集墳の出現や展開に社会的な動向との密接な関係が認められることから、当該期の首長墳における土器儀礼や首長墳系譜の変遷と比較検討することで、群集墳における土器儀礼の画期と社会的な動向との関係性、さらに古墳時代中期の段階における上毛野と下毛野の地域的な様相について土器儀礼の視点から検討していきたい。

2 対象資料・地域、年代観について

本稿では栃木県域と群馬県域に分布する古墳時代中期の群集墳を対象資料として扱うが、墳形は帆立貝形や円墳を基本として、築造開始の時期が概ね須恵器編年のTK208～TK47型式期に位置づけられる事例を取り上げる。そのため中期前葉から中期中葉に比定される方墳及び方形周溝墓は別途取り扱うこととする。また方形の墳墓については墳丘墓や周溝墓を問わず、便宜上、小型方墳とする。首長墳については大型の前方後円墳や墳丘長及び墳丘径が50m前後の帆立貝形古墳や大型円墳を指す。

本稿で扱う古墳の年代観については、おもに『前方後円墳集成編年』（近藤編1994、以下、「集成編年」とする）、田辺昭三の須恵器編年（田辺1966・1981）を参考としていく。また集成編年7期については中期中葉にあたるTK216型式期を集成編年7期前半、中期後葉にあたるTK208型式期を集成編年7期後半として、本稿では区分したうえで検討していく（第1表）。

本稿で対象とする古墳の分布する地域区分について、もっとも大きい区分では現在の県域に相当する栃木県域と群馬県域とする。各県域における小地域単位の区分については、栃木県域を大田原市や那珂川町を中心とする北部域、宇都宮市や上三川町を中心とする中部域、小山市や下野市を中心とする南部域に区分する。さらに群馬県域については巨視的であるが、県内をほぼ南北に流れる利根川を境界として、高崎市や渋川市を含む西部域と伊勢崎市や太田市を中心とする東部域に区分する。

本稿で対象とする古墳の出土土器について、おもに坏・埴や高坏の供膳具が主体となって構成される土器群を中心に取り上げる。また本稿で使用する「土器群」の用語については複数個体の土器が周溝内及び墳丘上などの特定の範囲に

第1表 年代観の併行関係

	前方後円墳集成編年 (近藤編1994)	須恵器編年 (田辺1966・1981)
中期前葉	4期	
	5期	
中期中葉	6期	TK73
	7期前半	TK216
中期後葉	7期後半	TK208
中期末葉	8期	TK23～47

集中して出土したものに加えて、出土状況や土器の型式などから同一の儀礼に使用されたことが推定できるものを含めた広義の範疇で用いる。

3 群集墳の展開と土器儀礼

3-1 中期前葉～中葉(集成編年4～7期前半)

3-1-1 土器儀礼の様相

栃木県域では中期中葉の笹塚古墳に先行する首長墳として、大型円墳の上神主浅間神社古墳(径54m)が挙げられる。周溝内からは土師器の壺類が出土しており、その他に3個体分の壺型埴輪が確認されている。また同じく大型円墳の鶴巻山古墳(径53m)では周溝内から複数個体の土師器高坏と小型壺が出土している。佐野市に所在する佐野八幡山古墳(径46m)においても主体部上から土師器高坏の破片が出土したことが報告されている(前澤1955)。よって中期前葉の段階において、時期的に多少先行する上神主浅間神社古墳では壺型埴輪に加えて壺類を中心とした器種が土器儀礼に用いられ、鶴巻山古墳や佐野八幡山古墳では土師器高坏を用いた土器儀礼が行われている。

中期中葉の首長墳における土器儀礼について、栃木県域では前方後円墳である東谷古墳群の笹塚古墳(全長100m)と塚山古墳群の塚山古墳(全長98m)が築造される。笹塚古墳の被葬者は大和王権と結びついて田川の低地開発を主導した、県域内で最初の「広域的支配者」と捉えられている(橋本2009)。土器類の出土について、前方部に設けられた造り出し部付近から表採された土器の中に小型の土師器高坏や小型壺が含まれていたことが報告されており、土器の形態からTK73型式段階に位置づけられている(秋元・今平1998)。また笹塚古墳に後続する大型円墳の鶴舞塚古墳(径53m)からも墳頂部の中心付近から土師器高坏と壺の破片が出土している。

群馬県域では中期前葉に東部域で太田天神山古墳(全長210m)や御富士山古墳(全長125m)、西部域で白石稲荷山古墳(全長140m)の大型前方後円墳が築造される。太田天神山古墳では外堀内から土師器高坏と小型壺が出土しており、近接する円墳のA陪塚(径35m)からも少数であるが、同様の器種の破片が出土している。白石稲荷山古墳では土師器高坏の出土は確認されていないが、近接して築造された長方墳の十二天塚古墳(長軸37m)では採集遺物として土師器の小型壺や注口土器に加えて高坏が報告されている(志村1989)。

前方後円墳や大型円墳を墳形とする首長墳に対して、その下位層に位置づけられる小型方墳として、栃木県域では中期中葉の中島笹塚7・8号墳が挙げられる。中島笹塚7・8号墳の時期は笹塚古墳や塚山古墳と同じ須恵器編年のTK73~216型式期に比定されている(内山2016)。その他、定期的に先行する中期前葉の小型方墳として、北部域の吉田・新宿6号墳や上神主浅間神社古墳の陪塚とされる神主38号墳が挙げられるが、これらの小型方墳では周溝内から土師器壺や甕類が出土している。群馬県域における中期前葉から中葉の小型方墳についても、行幸田山E区2・3号周溝墓、峯岸1号方形周溝墓では、いずれも周溝内より土師器小型壺が1個体出土している。周溝内から土師器の壺や甕類の小型器種が単体で出土する状況は栃木県域の小型方墳における土器儀礼との共通性が認められる。また当該期の小円墳に位置づけられる栃木県域の西刑部古屋原1・3号墳においても、出土した土器は壺や甕類を中心とする組成であり、下位層の古墳においては墳形の転換が行われても土器儀礼では小型方墳と同様の器種が選択されている。

3-1-2. 群集墳出現前の土器儀礼の階層性

栃木県域において中期中葉以降には土師器高坏を用いた土器儀礼が前方後円墳や大型円墳といった首長墳において採用されており、小型化された土器の存在や造り出し部及び墳頂部といった出土位置からも、土師器高坏が土器儀礼において供献を目的として使用される重要な器種としてみなされていたことを確認できる。とりわけ栃木県の中中部域では上神主浅間神社古墳から笹塚古墳への変遷にみられる、大型円墳から前方後円墳への墳形の転換と対応しており、土師器高坏を用いた供献儀礼に大きな社会的意義も備わっていたと考えられる。群馬県域では資料が少ないため詳細は不明であるが、太田天神山古墳や十二天塚古墳の報告か

ら土師器の高坏と小型壺を複数個体用いた土器儀礼が行われていたと考えられる。

上記の首長墳に対して、下位層の被葬者の墳墓に位置づけられる小型方墳や小円墳では小型壺や甕類の器種が中心に選択されている。よって当該期の古墳における土器類の出土状況から、群集墳の盛行する中期後葉より先行する時期には階層的に上位の首長墳を中心に土師器高坏を用いた供献儀礼が行われていたと考えられる。

3-2 中期後葉(集成編年7期後半)

3-2-1. 土器儀礼の様相

中期後葉の首長墳について、栃木県域の塚山古墳群では前方後円墳の塚山古墳に後続して帆立貝形古墳の塚山西古墳(全長63m)が築造される。本古墳ではくびれ部付近から甕や器台といった須恵器の大型器種の破片が多数出土している。また前方部南側の周溝底面から土師器の高坏2個体と壺1個体が出土している。

群馬県域では井野川下流域において新興の首長墳系譜である綿貫古墳群の築造が開始され、前方後円墳の岩鼻二子山古墳(全長115m)や不動山古墳(全長94m)が築造される。不動山古墳ではくびれ部北側に設けられた造り出し部の中央平坦面から和泉式に属する高坏などの土師器がまとまって出土したことが報告されている(大塚1989)。

両県域ともに当該期から円墳を主体とする群集墳の築造が開始する。そして下位層の墳墓における墳形の円墳化とともに前代まで首長墳に限定されていた土師器高坏を使用した供献儀礼が広く群集墳に採用されている。

栃木県域の群集墳では供膳具に長脚の土師器高坏を主体とする土器群が北部域の谷田1号墳、中部域の中島笹塚古墳群や磯岡北古墳群、そして首長墳の塚山西古墳に隣接する塚山6号墳などにおいて確認されている。共伴する器種としては土師器の坏・埴や小型壺、甕がみられる。また須恵器では中島笹塚2号墳や中島笹塚10号墳において甕や高坏が共伴するが、甕が共伴して出土する事例は確認できない。

群馬県域の群集墳では西部域の少林山台3号墳と下高瀬上之原5号墳、東部域の峯岸1号墳と舞台1号墳において土師器高坏を主体とする土器群が出土している。

土師器高坏を主体とする土器群の出土状況について、栃木県域の谷田1号墳では墳頂部付近から、中島笹塚2号墳では墳丘に設けられたテラス面からの出土が報告されている。群馬県域の舞台1号墳では坏部に内容物を土製品で表

現したミニチュア型の土師器高坏を主体とする土器群が造り出しの上面から出土している。その他の大半の事例では周溝内の覆土中から出土しており、いずれも墳丘上からの流れ込みと推定される。よって土師器高坏を主体とする土器群は被葬者に対する供献を目的に使用された土器群であると考えられる。上記の古墳の中には高坏を主体とする土器群とは区分された状態で土師器坏・埴を主体とする土器群を出土する事例も確認され、儀礼内容の違いに基づく使い分けが想定される。

両県域ともに土師器高坏を主体とする土器群は墳丘径が10m以下から20m前後まで幅広い階層の円墳から出土している。また谷田1号墳や下高瀬上之原古墳群など、周辺に大型の首長墳の存在しない、山間地の群集墳においても採用されている。

当該期の群集墳では群馬県域の白藤Y-5号墳や古海松塚51号墳、栃木県域の宮内2号墳など、土師器坏・埴を主体とする土器群のみが出土する事例も認められ、県域内や群集墳内でも土器儀礼に使用される器種の選択に差異が認められる。また栃木県域では南部域に分布する西高橋82号墳と牧ノ内20号墳が中期後葉の小型方墳に位置づけられているが、土器類は土師器坏・埴、小型壺や甕がおもに出土している(川又・荒井2023)。よって下位層の古墳においても、円墳と小型方墳の墳形に基づく土器儀礼の差異があった可能性も考えられる。

3-2-2. 首長墳系譜の動向と群集墳の土器儀礼

中期後葉の社会的な動向について、群集墳の出現と首長墳系譜の衰退・縮小に注目したい。群集墳の出現にみられる墳形の円形原理化については古墳を一元管理しようとする王権の強い意思の表れとする指摘がある(和田2007)。また寺前直人は大阪府豊中市に所在する待兼山遺跡やその周辺地域の群集墳の事例を取り上げ、中期中葉に盟主墳の縮小化と小方墳の増加という同時に進行する二つの現象に注目し、それらが起こった背景について「在来の地域首長勢力に墓制上の規制を加えつつ、下位集団に対しては小方墳築造と埴輪樹立を振興するという倭王権の新たな「支配」方式としてみなすことができるのではないだろうか」と述べており、大和王権との政治的関係のもとに生じた現象として捉えている(寺前2001)。上記の盟主墳の縮小化といった現象は栃木県域でも確認できる。栃木県域の塚山古墳群では中期中葉の前方後円墳である塚山古墳に後続して、中期後葉以降

には帆立貝形古墳の塚山西古墳と塚山南古墳が築造されており、前方後円墳から帆立貝形古墳といった墳形の変化や規模の縮小が認められる。同様の現象は東谷古墳群でも確認され、笹塚古墳に後続して大型円墳の鶴舞塚古墳と松ノ塚古墳が築造される。

群馬県域では中葉前葉の太田天神山古墳や御富士山古墳に後続する大型の前方後円墳として、前述した綿貫古墳群に加えて、鶴山古墳(全長104m)や今井神社古墳(全長71m)が築造される。また赤堀茶臼山古墳(全長59m)や丸塚山古墳(全長81m)など帆立貝形古墳も多く築造される。よって群馬県域では太田天神山古墳には規模が劣るが、中期前葉から継続して中期後葉に各地域で大型の前方後円墳や帆立貝形古墳が複数築造されるなど、栃木県域とは異なる社会的な動向が認められる。これら県域間の違いが副葬品や埴輪、そして土器儀礼といった群集墳の諸属性にも大きく影響していたと考えられるが、具体的な関係性を明らかにすることは難しい。

土師器高坏を主体とする土器群を出土する群集墳は、畿内地域の野山古墳群や後出古墳群を始めとして、汎列島の認められることから、群集墳の出現や展開と密接に関係する可能性が指摘されている(田村2008)。具体的な事例としては福島県域の仏坊11号墳、新潟県域の飯綱山65号墳、静岡県域の宇藤蓮台1号墳、石川県域の和田山22号墳などが挙げられる。以上のことから、群集墳の出現に伴う土師器高坏を主体とする土器群を使用した供献儀礼の普及の背景には大和王権による列島規模の地方支配の大きな影響が想定される。

3-3 中期末葉(集成編年8期)

3-3-1. 土器儀礼の様相

中期末葉の首長墳における土器儀礼について、栃木県域では帆立貝形古墳の塚山南古墳(全長58m)において、墳丘くびれ部から土師器高坏を主体として二重甕や脚付有蓋壺といった特殊な器種の須恵器を加えた土器群が出土している。とりわけ土師器高坏については粗雑なつくりで内外面に赤彩のみられる仮器化された土器であり、土師器高坏が供献儀礼のための重要な儀器として位置づけられている。また時期は下るが、6世紀初頭の築造とされる行基平山頂古墳(全長42m)においても、墳丘くびれ部の東側テラス面から土器集積遺構が確認されており、10個体以上の土師器高坏を主体として須恵器大形器台や高坏の加わる土器群が

出土している。土器群の出土位置や土師器高坏を主体として須恵器が加わる器種組成、土器が赤彩されている点は塚山南古墳と共通している。

群馬県域の遠見山古墳(全長70m)では墳丘の第3段葺石前面のテラス面において祭祀跡が確認されており、「三ツ寺型高坏」を含む、土師器高坏12個体に壺と坏を加えた土器群が出土している。さらに保渡田八幡塚古墳(全長102m)でも東中島の埴輪列内側から土師器高坏を主体とする土器群が出土している。また保渡田古墳群の井出二子山古墳(全長108m)では墳丘や中島から甕や高坏、壺などの須恵器が中心に出土しており、首長墳の中でも特異な様相を示す。これらは焼け歪みを含む在地産の須恵器とされている(若狭2009)。

以上のことから、両県域の首長墳において土師器高坏を主体とする土器群を用いた供献儀礼が行われており、各古墳から出土した高坏には儀器としての性格が強く認められる。しかし群馬県域の首長墳では上記の土器群に須恵器が共伴しないこと、出土した高坏の形態が脚付坏・埴にも捉えられることなど、県域間の差異も認められる。

群集墳の土器儀礼では両県域で明確な地域差が認められる。栃木県域では磯岡北9号墳や中島笹塚15号墳、上原7号墳などで短脚の土師器高坏を複数含む土器群が出土している。これらの土器群で注目される点として、高坏と近い個体数の土師器坏・埴が共伴して出土していることが挙げられ、同一の儀礼に使用されたセット関係を示すものである可能性が高い。また磯岡北3号墳や権現山B区65号墳など10個体以上の土師器坏・埴を出土する古墳、須恵器を主体とする土器群の出土も確認できる。10個体以上の土師器坏・埴は径20m前後かそれ以上の円墳から、短脚の高坏を含む土器群や須恵器を主体とする土器群は径15m前後かそれ以下の円墳から出土する傾向が認められ、これら多様な器種組成は墳丘規模に表れた被葬者の階層に基づく秩序によって選択されていたと考えられる。

群馬県域の群集墳では土師器高坏を出土する事例は少なく、群集墳の帆立貝形古墳から小円墳まで、供膳具に土師器坏・埴を主体とする土器群の出土事例の増加、広域的に確認できる点で県域内における土器儀礼の斉一性を認めることができる。上記の土器群については、土器の個体数に差異はあるが、墳形に基づく被葬者の階層によって器種組成が大きく変化しないこと⁽²⁾、出土位置では小円墳で周溝内やテラス面などに据え置かれた状態で出土することや出土方位

も南側を中心とする方位に配置する傾向のあることが、先行研究においても指摘されている(藤野2019・山田2005)。

3-3-2. 首長墳系譜の動向と群集墳の土器儀礼

中期末葉の群集墳における土器儀礼の地域性について、各県域の首長墳系譜の変遷にみられる社会的な動向との関係性を検討してみたい。

群馬県域では土師器高坏を主体とする土器群を用いた供献儀礼は保渡田八幡塚古墳や遠見山古墳の首長墳、古海原前1号墳の一部の帆立貝形古墳に限定して行われている。古海原前1号墳からは同向式画文帯神獸鏡を始めとして、銀装振文環頭大刀や初期馬具等の豊富な副葬品が出土しており、その他の群集墳内の帆立貝形古墳よりも優位な被葬者の階層が想定される。それに対して、群集墳では周溝内やテラス面から少数個体の土師器坏・埴を主体とする土器群の出土が顕著であり、これら土器儀礼の斉一性は群集墳の展開と社会的な動向が深く関係していたことが背景として挙げられる。群馬県域では中期後葉に井野川下流域において綿貫古墳群の首長墳系譜が築造されるが、中期末葉には井野川上流域において保渡田古墳群や総社古墳群の築造が開始されるように、地域政権の中心となる首長墳系譜の移動が認められ、新たな首長の地域支配による群集墳の再編成が行われたと考えられる。井出二子山古墳の被葬者については上毛野西部の首長連合体を主導した、新たな地域経営者像が想定されており、連合内部の秩序が墳墓に備わった器物の属性に備わっていたとされている(若狭2015・2018)。また東部域にも前方後円墳の鳥崇神社古墳(全長70m)が築造されているが、周溝内に鳥状遺構の中島が確認されることから保渡田古墳群との系譜関係が注目されている(橋本・加部1994)。よって保渡田古墳群の首長による地域支配の強い影響が東部域の群集墳を含めた県域全体の土器儀礼の斉一性にも表れたものと考えたい。以上のことから、群馬県域の首長墳における土師器高坏を用いた供献儀礼や群集墳における土器儀礼の斉一性については、副葬品や埴輪と同様に連合内における秩序の表出として捉えることができる⁽³⁾。

中期末葉における畿内地域の群集墳では、楠本哲夫が「六文銭」祭祀として設定した、須恵器坏を中心とする土器群を用いた土器儀礼の普及が認められるが、その初現の段階では土器群がおもに墳丘裾部や周溝内に配置されている(藤原1985・楠元1992)。群馬県域の群集墳において斉一的に普

及する、土師器坏・埴を主体とする土器群を用いた土器儀礼についても、周溝内やテラス面に土器が据え置かれた状況で出土することから、同時期の畿内地域や北部九州地域の群集墳で行われた須恵器坏を主体とする土器群を用いた儀礼に系譜が求められると考えたい。

栃木県域では中部域の首長墳系譜が中期中葉から継続して帆立貝形古墳の塚山南古墳、大型円墳の松ノ塚古墳(径52m)といった大型墳を築造しており、群馬県域とは異なる社会的な動向が認められる。そして松ノ塚古墳の築造を契機に造墓を開始する群集墳として、権現山遺跡B区の群集墳が挙げられる(橋本・谷中2001)。当古墳群では須恵器を主体とする権現山B区3号墳や短脚の土師器高坏を主体とする権現山B区65号墳など、出土した土器群に多様な器種組成が認められる。よって土器儀礼の斉一性が顕著な群馬県域とは異なる土器儀礼の秩序が栃木県域の社会の中で構築されていたと考えられる。また当該期の栃木県域では新興の首長墳系譜として南部域に前方後円墳の摩利支天塚古墳(全長121m)が出現する。摩利支天塚古墳の出現を契機として築造を開始する群集墳には飯塚古墳群が挙げられるが、中期末葉の古墳については不明である。南部域で当該期に築造を開始するか、基数の増加する群集墳として寺野東古墳群や西高椅古墳群が挙げられる。上記の群集墳では供膳具に土師器坏・埴がおもに出土しており、短脚の土師器高坏を複数含む土器群の出土は確認できない。中期後葉の事例も含めて、宮内2号墳や寺野東1・2号墳の被葬者が石製模造品の生産や集落を取りまとめる「生産地域支配者」と指摘されているように(篠原1997・津野1998)、南部域の群集墳の被葬者の性格や階層性については、県域内でも他地域の群集墳とは異質であったことが想定される。また、一基の古墳から出土する坏・埴の個体数や須恵器の出土状況など群馬県域の群集墳とも異なる様相が認められる。

4 おわりに

本稿では栃木県域と群馬県域における古墳時代中期の群集墳を対象として、出土土器の器種組成や出土状況をもとに、首長墳や先行する小型方墳を含めた土器儀礼の時期的な変遷や地域性を検討し、群集墳における土器儀礼の画期、各県域内における階層性や秩序を明らかにした。さらに各県域における首長墳系譜の衰退・縮小や新興にみられる社会的な動向をもとに、群集墳の土器儀礼の変遷や地域性の

背景には地域首長や大和王権による地方支配の影響が反映されていることを指摘した。

※本稿では紙面の制約により、資料として取り上げた古墳の調査報告書の挿図を含めた出典については、本文および参考文献一覧より割愛した。ご了承ください。

謝辞

本稿を作成するにあたって、東北芸術工科大学の教員方から多大なご教授を賜った。また資料の観察にあたっては、大田原市教育委員会、大田原市なす風土記の丘湯津上資料館、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターにご協力頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

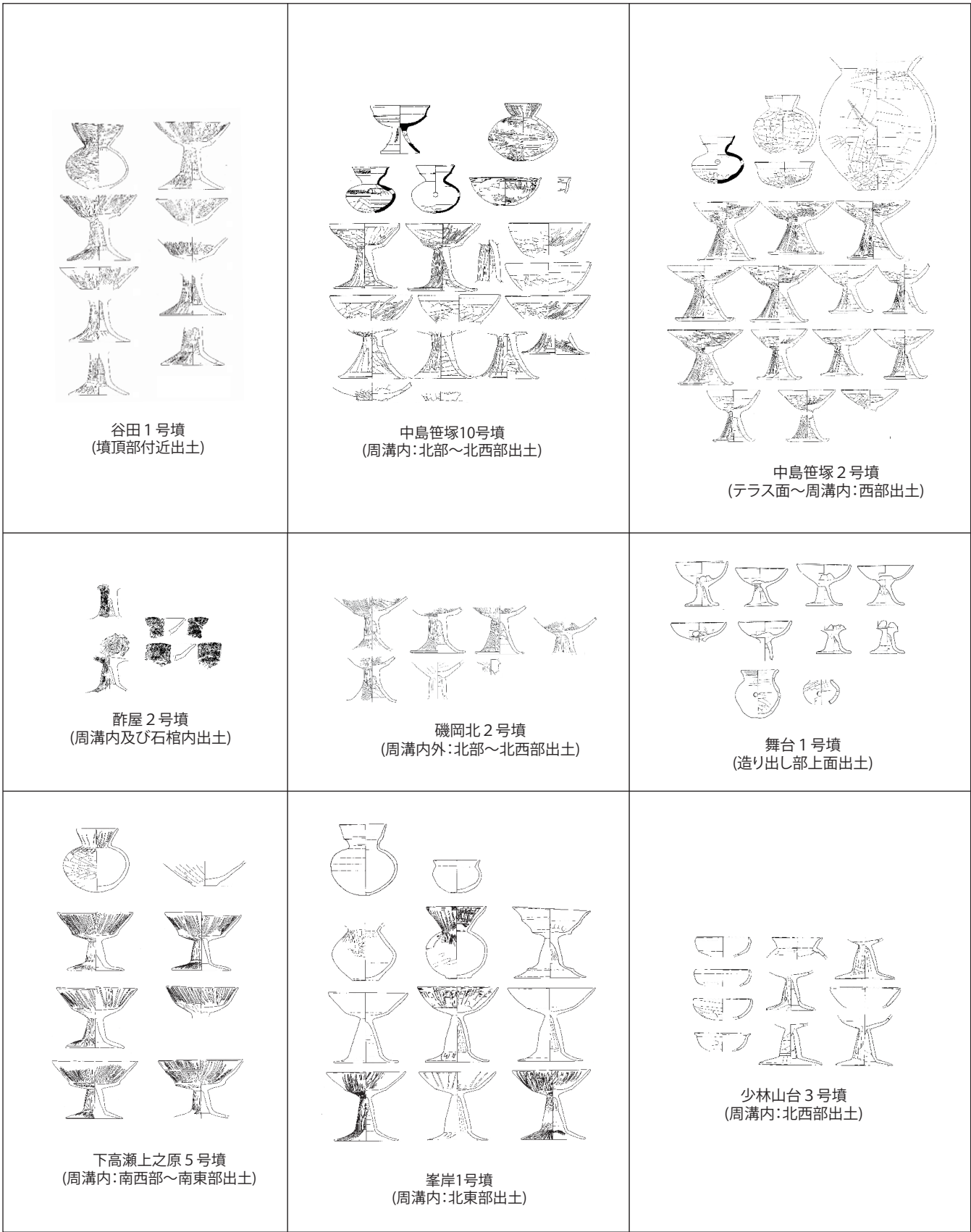
註

- (1)本稿で主題として取り上げた「土器儀礼」について、古墳構築過程で行われる儀礼については土生田純之が整理しており、古墳の選地から築造途上において行われる儀礼の痕跡なども確認されているが(土生田1995)、本稿では遺体埋葬後の土器類を使用した儀礼のみを対象とする。
- (2)群集墳における墳形に基づく階層性について、高崎情報団地遺跡や古海松塚古墳群では円筒埴輪の形態や形象埴輪の有無に帆立貝形古墳と円墳の間で大きな差異は認められないことが指摘されている(若狭2003)。土器類についても帆立貝形古墳の高崎情報団地21号墳や古海松塚1号墳では土師器坏・埴が中心に出土しており、土器儀礼における使用器種も帆立貝形古墳と円墳の間で概ね共通している。また白藤古墳群でもV-4号墳やV-7号墳において、埴輪の有無に墳丘規模の大小に基づく階層差が認められるが、出土した土器の器種組成に大きな差異は認められない。
- (3)本稿で対象地域としなかった埼玉県域について、首長墳の稲荷山古墳(全長120m)では後円部造り出し周辺から須恵器の有蓋高坏を主体とする土器群が、中堤から土師器高坏が複数個体出土している。群集墳については進屋敷古墳群で少数個体の土師器坏・埴を主体とする土器群が周溝内に据え置かれた状態で出土する事例を多く確認することができ、土器群の器種組成や出土状況などに群馬県域の群集墳と共通する点が多い。新屋敷古墳群は、稲荷山古墳と同時期である、TK23-47型式期が築造の開始時期とされている(大谷1998)。以上のことから、埼玉県域においても群馬県域の保渡田古墳群と同様に、新興の首長墳系譜の出現に伴って土

師器杯・埴を主体とする土器群を用いた土器儀礼の新たな秩序の普及があった可能性を考えたい。

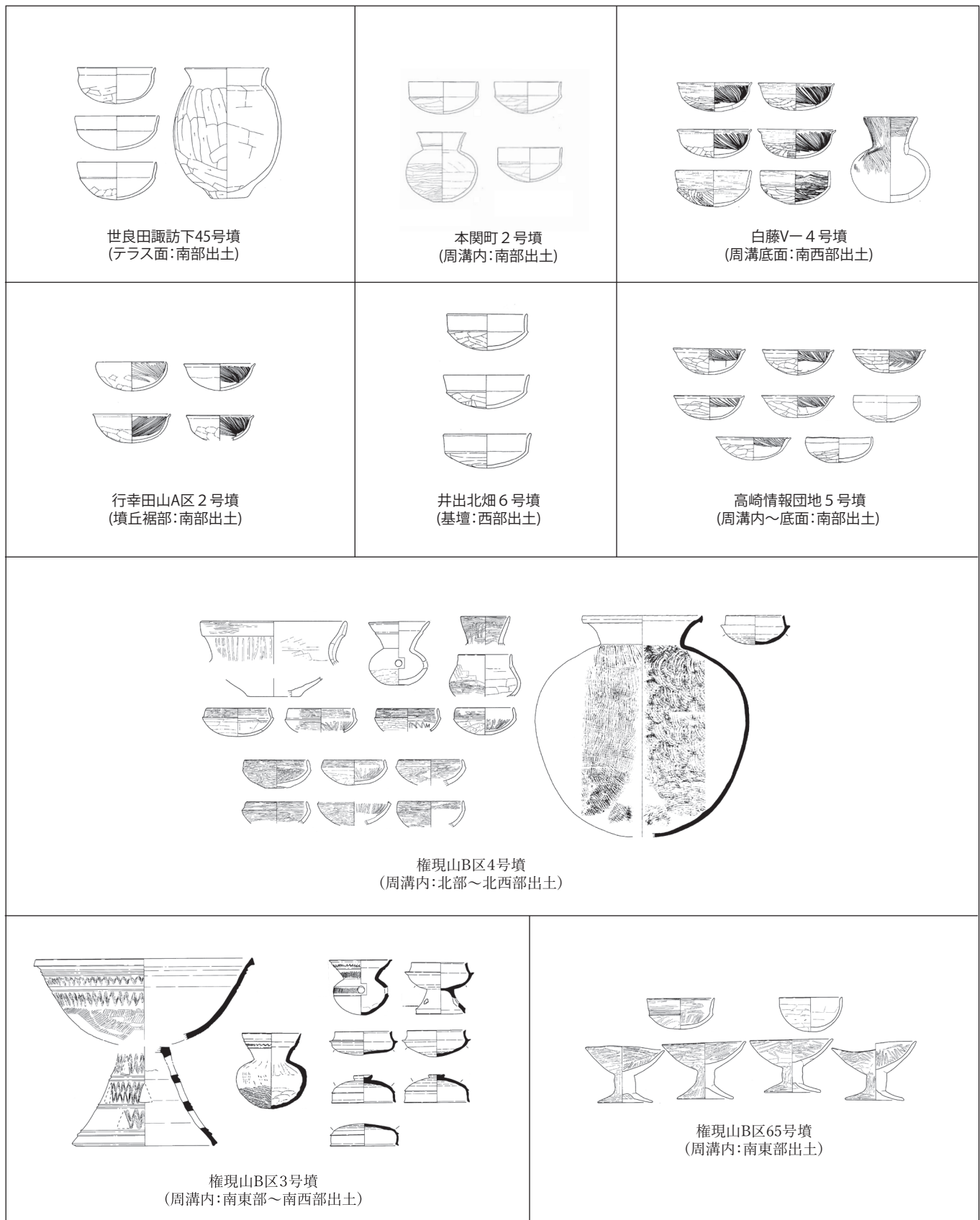
参考文献一覧

- ・ 秋元陽光・今平利幸1998「宇都宮市東谷笹塚古墳出土の遺物」『峰考古 第13号』宇都宮大学考古学研究会
- ・ 内山敏行2016「古墳時代中期の下毛野地域と東谷・中島地区遺跡群」『とちぎを掘る 栃木の考古学の到達点』栃木県考古学会 随相社
- ・ 大谷徹1998「進屋敷古墳群の様相」『進屋敷古墳群D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・ 大塚初重1989「不動山古墳」『日本古墳大辞典』東京堂出版
- ・ 川又隆一郎・荒井啓汰2023「栃木県域における方墳の展開」『第26回 東北・関東前方後円墳研究会 大会《シンポジウム》東北・関東における方墳の展開 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- ・ 北山峰生2018「近畿―木棺直葬墓の須恵器―」『季刊考古学 第142号 須恵器の変容と各地の古墳文化』雄山閣
- ・ 楠元哲夫1992「六文銭―古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景―」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- ・ 近藤義郎編1994『前方後円墳集成 東北・関東編』山川出版社
- ・ 篠原祐一1997「栃木県古墳時代祭祀総覧 祭祀関係遺物の出土から」『研究紀要』第5号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・ 志村哲1989「十二天塚古墳の築造年代について―採集遺物からみた築造年代の分析―」『群馬県史研究 第29号』群馬県史編さん委員会
- ・ 白石太一郎1981「群集墳の諸問題」『歴史公論2』古墳時代の社会 雄山閣
- ・ 田辺昭三1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
- ・ 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- ・ 田村隆太郎2008「木棺直葬墳の土器群と葬送儀礼」『森町円田丘陵の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所第186集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・ 津野仁1998『寺野東遺跡Ⅶ』栃木県埋蔵文化財調査報告書 第209集 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・ 寺前直人2001「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式―豊島地域における小古墳の検討を通して―」『待兼山遺跡Ⅲ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- ・ 橋本澄郎・谷中隆2001「東谷古墳群」と権現山遺跡・百目鬼遺跡」『権現山遺跡・百目鬼遺跡Ⅵ』栃木県埋蔵文化財調査報告 第257集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
- ・ 橋本澄郎2009「栃木の首長墓に関する諸問題」『野洲考古学論攷』中村紀男先生追悼論集刊行会編
- ・ 橋本博文・加部二生1994「上野」『前方後円墳集成 東北・関東編』近藤義郎編 山川出版社
- ・ 土生田純之1995「古墳構築過程における儀礼―墳丘を中心として―」『古墳文化とその伝統』勉誠出版
- ・ 土生田純之1996「葬送墓制の伝来をめぐって―北関東における事例を中心に―」『古代学研究』第48巻第1号
- ・ 藤野一之2019「古墳時代の須恵器と地域社会」六一書房
- ・ 藤原学1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念 献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会 奈良明新社
- ・ 前澤輝政1955「佐野八幡山古墳調査概報」『古代 第16号』早稲田大学考古学会
- ・ 右島和夫1990「古墳から見た5、6世紀の上野地域」『古代文化42-7』
- ・ 山田俊輔2005「古墳時代中期群集墓分析の新視角」『月刊 考古学ジャーナル 528号』ニューサイエンス社
- ・ 若狭徹2003「初期群集墳と帆立貝式古墳」『帆立貝形古墳を考える』かみつけの里博物館
- ・ 若狭徹2009「井出二子山古墳の歴史的意義」『井出二子山古墳』高崎市文化財調査報告書第231集 高崎市教育委員会
- ・ 若狭徹2015「東国から読み解く古墳時代」吉川弘文館
- ・ 若狭徹2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階―上毛野地域を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告 第211集』国立歴史民俗博物館
- ・ 和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本 第5巻 近畿Ⅰ』角川書店
- ・ 和田晴吾2007「古墳群の分析視角と群集墳」『関東の後期古墳群』佐々木憲一編 六一書房



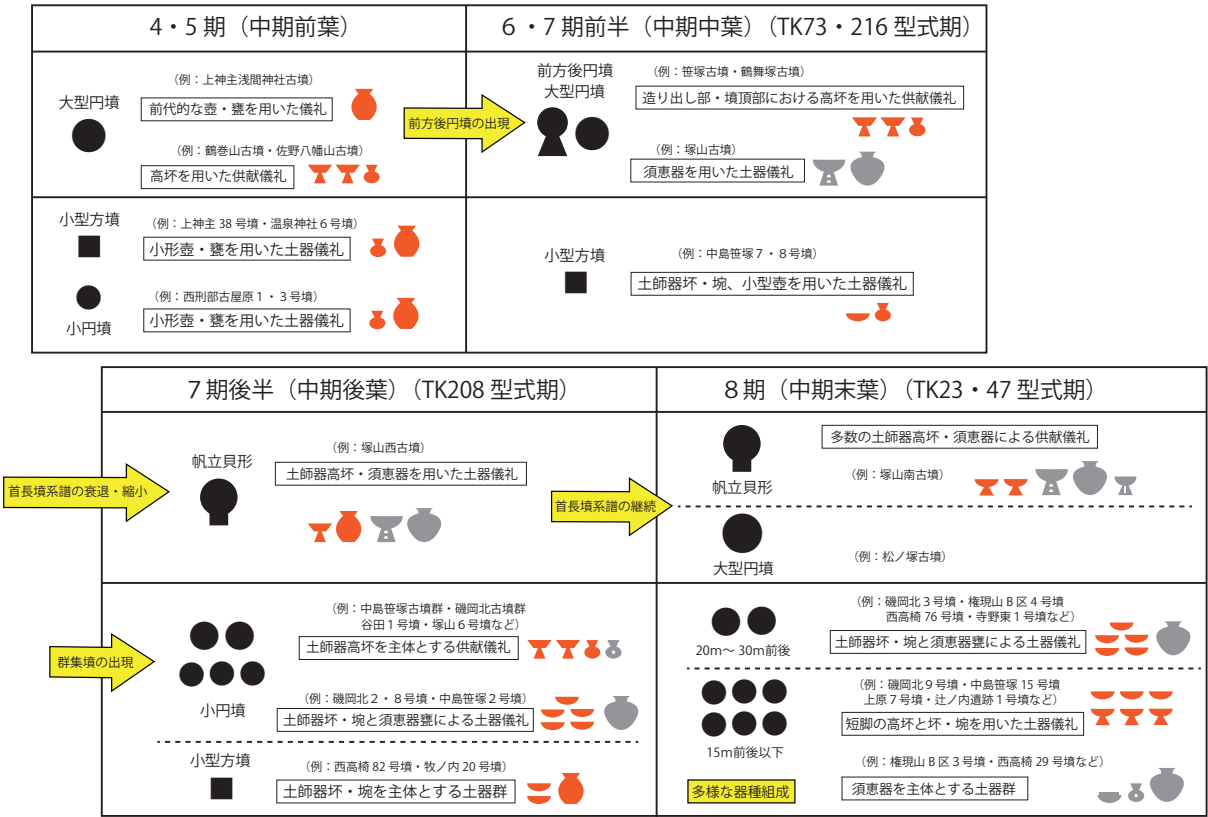
0 20cm

第1図 栃木県域・群馬県域の群集墳における土師器高杯を主体とする土器群(中期後葉)

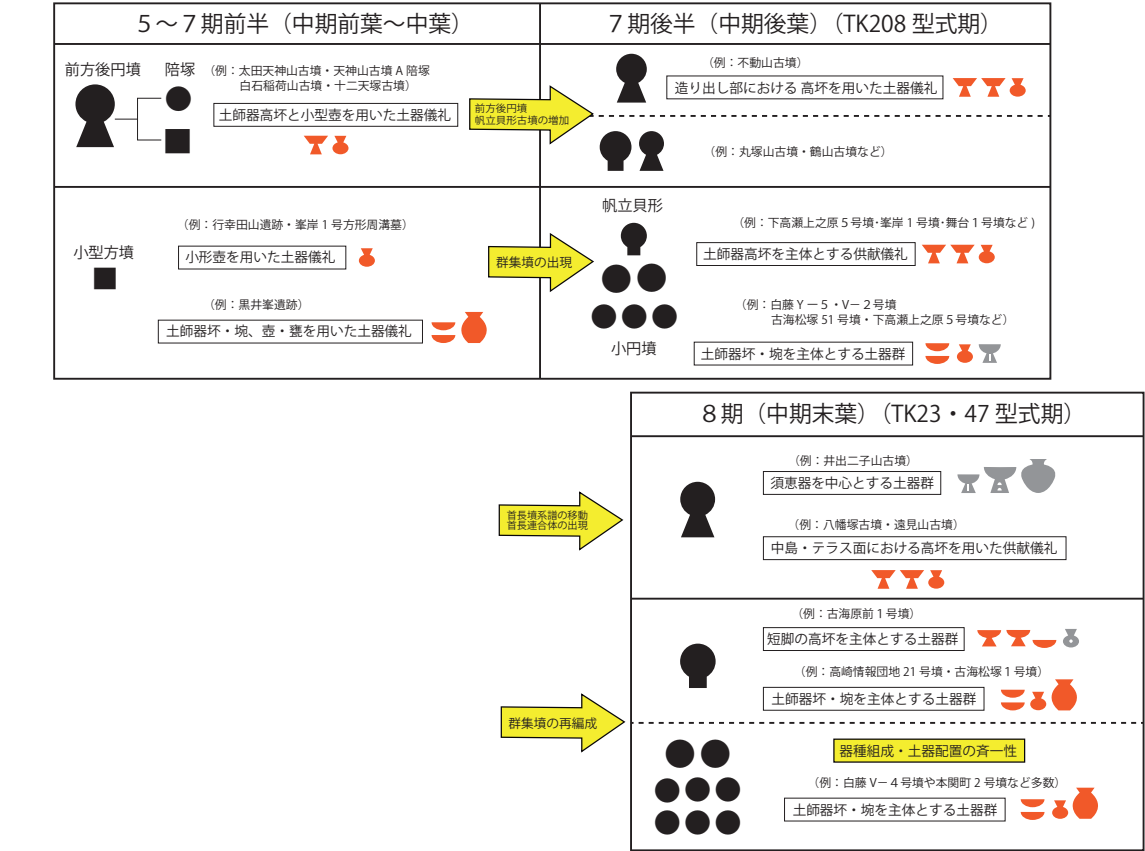


第2図 栃木県域・群馬県域の群集墳において出土した土器群(中期末葉)

0 20cm



第3図 栃木県域における土器儀礼の変遷図



第4図 群馬県域における土器儀礼の変遷図